第四十一回中央教化研究会議　基調講演Ⅰ

国家と宗教――仏教政治思想復興のために――

保坂俊司

はじめに

初めまして、保坂でございます。今日はよろしくお願い致します。早速お話をさせていただくわけでございますけれども、このような立派な席でお話を申し上げるというのはちょっとなんか場違いのような気がするんですが、先ほどもご紹介ありましたけども、田澤所長・高佐主任からお誘いいただきましたので、まさに釈迦に説法なんですが、今日は九十分ほどですね、皆さんに私の日頃やっていることをお伝えできればいいかなと考えます。一昨年『国家と宗教』という本を出して以来、色々な所からお叱りを受けたり、中にはこのようにお招きいただくことがあります。先日も鎌倉の建長寺さんからお話をいただきまして、「釈迦に説法ですから、とちょっとご遠慮させていただきたいんですけど」と申しましたら、「最近お坊さん、お釈迦さんも忙しいから、勉強足りない所は是非教えていただきたい」というようなお言葉をいただきました。これも仏縁ですのでお話をさせていただきました。今回も仏縁を頂きましたので僭越ながらお話しをさせて頂きます。

Ⅰ部―日本近代と「宗教」の問題点

〈日本の近代化と嫌仏〉

まず最初にちょっとお断りしておきますけれども、私口が軽いもんですから、ぺろっとこう、皆さんに癇に障ることとか、まずいこと言ってしまうかも知れませんけどお許しください。私自身は、仏教というものが、この場合仏道、という方がほんとは正しいんですけど、あまりにも日本社会、現代の日本社会で軽んじられている、或いは、邪険にされていると言っていいと思うんですけど、そういう状況に対してですね、これは何とかしなきゃならないと考えています。もちろん在家の立場からですが、非常に危機感を持っておる一人でございます。ですから、今流に言いますと仏教エイドってやつでございまして、なんとか仏教にもっと頑張っていただきたい、そのためにはやっぱりですね、仏教を支えておられるご住職の方々、宗門の方々に自信を持って、仏教のすばらしさというものを宣伝していただきたいと願っているものです。

と申しますのも新聞とか雑誌ですと必ず戒名料がどうのこうのとか、お坊さんがどうのこうのって、足を引っ張るようなことばっか書いてあるわけです。いろんなことで仏教は批判されております。一方で仏教の役割という面に関しては殆ど報道がなくて、なんかお坊さんというと、坊主憎けりゃなんとか、ってありますけどね、そういう方向ばっかこう強調されてる。でも、よくよく考えるとこのような風潮も、日本の近代以降の廃仏毀釈からですね。一般に廃仏毀釈っていうのは明治八年ぐらいで一応、終結するという風になっておりますけどその後に、嫌仏思想、或いは嫌仏政策ですね、ケンと言っても見るじゃありません、顕かにするじゃありません、嫌悪のケンです、嫌うってことですね。つまり、日本の近代っていうのはですね、敬神廃仏から敬神嫌仏に続いているわけです。神様を尊敬してですね、仏を排除する。更に仏教を嫌う。僕はそういう日本近代のあり方というものに対して今こそ反省すべき時が来

たと考えております。もちろん廃仏毀釈にもそれはそれなりの意味があったんでしょうけれども、しかしもう一回、江戸時代までの神仏習合、昔は神よりも仏のが先でしたので仏神揉合とか習合って申したようでございますけれども、そういうのを参考にしてですね、新しい日本人の精神の形というものをやっぱり作っていかないと、或いは作っていただかないといけないんじゃないかと考えています。そのためには、お坊さんもそうですし、我々一般の在家の人間もですね、しっかり仏教を理解して、そして再評価していくという必要があるんだと思うんですね。

私は、専門がインドなものですから、日本に関しては殆どその素人同然なんですが、日蓮さんが立正安国を唱えて、こういう仏教の精神で国を作っていくんだ、国家を安らかにしていくんだと示された。そういう精神が、今こそやっぱり必要な時期じゃないかと思うんです。まさに今の日本社会は正を立てませんから不正が横行して、国が安んずるじゃなくて暗闇になってしまっています。例えば先日も福田首相が政権を投げ出してしまいました。ああいうことって、本当に政治家として何か、一本なんか足りないんじゃないか、大事なものが足りないと感じます。あんまり良い例じゃないんですけど、あのブッシュさんを見ていただくとですね、僕はあのかたくなさと言いましょうか、自分の信じたことに対してですね、決して譲らないというあの頑固さですね。あれで世界中の人が大変迷惑しておりますけれども、しかし、政治家としての何か一本筋が通っている、ということはあるような気がします。ああいう厳しさと言いましょうか、そういうものが今日本の中に欠落しちゃってるような気がするんですが、そういうものの中にやはりですね、宗教を軽んじてきた、特に仏教を軽んじてきた日本の近代のツケと言いましょうか、そういうものがあるんじゃないかと考えます。今日はそれを、私の立場から、この点に関して少し紹介させていただいて、どういう風なことを今後していくと少しはマシになるかな、ということも最後に提案させていただくことに致します。

恐らく皆さんもお感じになっていることだと思いますけれども、最近の日本はちょっとおかしいですよね。親が子供を殺してみたり、子が親を殺してみたり、ちょっと勉強しろと言っただけでですね、布団の上で子供に刺されちゃ

う。昔は布団の上で死ねば本望ということがありましたけど、こういう死に方では浮かばれません。まさに、修羅なんでしょうか。ところで事件が起きますとですね、精神分析の学者とか、或いはなんとかコメンテーターという人が色々言うんですけど、こういう時に限って宗教学者とか、まあ宗教家とまでは言いませんけどね、そういう方が呼ばれないんですね。まさにその精神の危機、日本社会の制度じゃなくて、根本的な精神の危機の時に、宗教という、そういう問題に一番大事な或いは深く関わっている、或いは身近に接している人達が呼ばれない、意見を求められない、というのは何か不思議な感じが致します。別に僕を出演させろと言っているんじゃないです。お坊さんたち、或いはそういう我々の先輩方がいくらでもですね、優秀な方がいてそういうの分析できる人がいるのに、なんかそのタレントさんが離れたくっついたというようなレベルの、ノリの上でそういうような話をする。こういうあり方というのに、どうもやっぱり僕は違和感を感じるんですね。その原因が何か、ということなんですが、たくさんあると思うんですが、やはり一つは、近代の日本を作ってきた一つの国家の方針といいましょうか国家体制、特に戦後の政教分離っていう大きな枠組みがあって、ここら辺にひとつ、運用のまずさがあったんじゃないか、或いは日本の伝統にふさわしくない部分があったんじゃないかと考えております。そこで、政教分離っていうものに対してちょっとお話をさせていただきます。

〈政教分離は神聖不可侵か〉

資料にも書いておきましたけれども、今政教分離って言いますと、戦前のまさに天皇は神聖にして侵すべからずという雰囲気で、この点に関しては問答無用と議論を超越して誰もさわらせないというような、そういう風潮がなんとなくあるような気がします。一方で、押しつけ憲法だから改良しなきゃいけないという論調もあります。しかも、どこを改良するかというと決まって出てくるのが憲法第九条ですね。戦争の放棄というところを議論するんですけれど

も、もっと他にするとこがあるんじゃないかと私は思います。私はその、九条改制に対してどうのこうのって意識はあまりないんですけれどもそれよりももっと国家としてですねもっと大事なことがあると思っております。戦争ってのは個人でいえば喧嘩のことでしょう。そういう非日常的な部分だけを問題にするんじゃなくて、日常的な生き方ですよね。生き方として普段から道徳的に、或いは他者を尊重する姿勢です。慈悲をたれるとは申しませんけども、つきあいをうまくしていくということを一切やらないで、いざ喧嘩になったら相手をぶん殴ってもいいようにしたい、などというそういう議論ですよね。そのような考え方はやはり改めねばならないと思うのです。

だから「憲法九条を改めよ」じゃなくて、戦争にならないようにもっと色々手立てを尽くそうと考えるのが先です。そのために憲法を議論するんだというような論調がもっと為されるべきだと思います。しかも今の風潮は基本的なことがなくて、ただその戦争になったら、よそから攻められたら、こういう議論ばっかしてる。それではだめなんじゃないかと思います。余りに智慧のない議論です。少なくとも仏教的な立場に立てばそう言えます。同様に政教分離っていう制度も深く議論していって、改めるんだったら改めるという基本的姿勢が大切だと思います。九条でも、序文でも根本から議論する。例外なく議論する。もちろん私は憲法学者じゃありません。一介の宗教学徒ですから、難しいことは分かりません。しかしそういう風に感じるということです。もっとも、その根本が揺れているのが今の日本で、それに対してどうするかの一つの私論は今日のテーマであります。

さて政教分離ということに関して所長さんのほうから再三にわたって、なんとか触れてくれと仰るんですね。ちょっと習わぬお経を読んでみました。資料に書いてありますが、政教分離ってのはなんで政宗分離じゃないのかな。皆さんお感じになりませんか。政治と宗教を分離するっていうのが、政教分離の精神だとすれば本来略字を作る時に頭同士だとか、おしり同士だとかをくっつけますよね、これだとたすき掛けになってますよね。なんか不思議だなと思ったんですね。で、よくよく調べて、っていうかすぐ分かるんですけど、政教分離の教は、宗教の教じゃないんだと

いうことですね。簡単に申せばこれは教会の教です。日本でいえば一つの教団・宗派とか一つの教団ということです。アメリカではですね、政治と国家権力とキリスト教というのは、もう密接不可分です。ヨーロッパからアメリカに渡って理想の国（神の国）を建国する。その結果できた理想国家がアメリカです。建国の理念は、プロテスタントというよりも、ピューリタンの精神です。彼らはヨーロッパから追い出されて、或いはヨーロッパを捨ててアメリカに理想の国を求め建国しました。もちろんこの場合の理想は宗教的理想です。お金がいっぱい儲かるとか、土地がいっぱい手に入るというようなそういう、金銭的な理想ではなくてですね、神様が、そのピューリタンに約束した色々な教えがあります。簡単に言えば聖書なんですけど、その教えをそのままに純粋に実現した国がアメリカです。まさに原理主義国家と今で言ったらいいと思います。まあ原理主義というと悪い意味で使われておりますけど、純粋に宗教的理想で社会を作っていく、こういう理想で作られたのがアメリカであり、その指針、或いは背骨になるものがアメリカ憲法ですね。アメリカ憲法ってじゃあ神聖不可侵なのか。そうじゃないですね。アメリカ憲法ほど、なんか憲法学者に言わせると何回も手が加えられて、修正条項がないと解釈できないというような憲法も珍しいくらいだという評価もあるそうです。

つまり憲法のご本家は一生懸命書き換えてですね、より良いアメリカを作るわけです。つまり憲法をどんどんどんどん変えていって、修正していってですね、そして理想を作ろうとしている。そういう精神を、日本は学んでいる筈なんですが、いつの間にか六十数年前に成立したものに固執し、そしてそれを奉じていれば現実は良くなるんだ、というようなことで少しも変えようとしない。資料では成蹊大学の宇野先生の憲法講義の一節をちょっと引かせていただきました。（uno.law.seikei.ac.jp/~annen/con08-0）そうしましたらその先生が憲法の中でその宗教に関してですね、この政教分離という言葉は、実は憲法の条文の中にないというのが書かれているわけです。さらにそれだけじゃなくてその宗教という定義が法律的には一定してそうです。ですから「百選四十五号」という事件では神道をどう扱うか

ということがキーワードとなって判断が分かれているそうです。つまり宗教の理解が一定していないのです。我々は宗教学者ですから、宗教という言葉の歴史に関してはちょっとうるさいんです。で、法律家は言葉を厳密に使うのが法律なんですね。ところが、その法律家が使う宗教という言葉が非常に曖昧であって、そして解釈が多様である。そういうことに関して、法律家はあまり敏感になっていないということが、改めてこのホームページを見てましたらよく分かりました。

〈「宗教」という言葉の問題点〉

ご承知のように宗教という言葉は、宗教学者と同じくらい解釈があるとかなんとかってよく言うんです。実は宗教学者の中でも一定化してないんですが問題はですね、宗教学者だけじゃなくて、日本のこの宗教という漢字の二字熟語ですね、ここに非常に大きな近代的断絶があることです。先ほど所長が目に見えない豊かな大地の下に大きな亀裂があって、という話をされました。普段目に見えないもんですから、すーっと通り越してしまうんですね。しかし時々、その矛盾が露呈して、例えば地震なら大地震となり大被害が起きます。これと同様に宗教というのは、法律の場でがーんと大きな断絶を引き起こしている感じです。それは何故か。それは我々が伝統を軽視しているからです。歴史を学んでいない、ということです。簡単に申しますと宗教という言葉は、皆さんご存知のように仏教用語なんです。「言葉にならない真実を言葉にする」あるいは「宗派の教え」というのがまあ元々なんだそうですが、それが明治になるまでずーっとほぼそういう意味で使われております。ところが諸説あるんですが、日独通商条約であろうと言われていますが、この条約締結の時にレリギョというまあラテン語の言葉があるんですが、これを訳す時に「宗教」という、従来仏教で使われていた言葉を当てはめたんです。そうすると、そこで二つの意味がこの言葉に盛り込まれることになります。仏教的意味と、キリスト教的な意味ですね。キリスト教のレリギョというのは、まあ色々の

説があるんですが、一番大事なことは神と人間を再び結びつける。レ、というのはｒｅですから、これは再びという意味です。リギョというのはまあ、専門的な解釈はいっぱいありますけど、ヨーロッパ人は、だいたい結びつけるっていう風に解釈してきたんですね。キリスト教の教えではアダムとイブは神様を裏切って、失楽園、楽園から追放されたわけです。そこでイエス・キリストが再び神様に、罪を詫びて、贖って再び神様と人間を結びつけてくれたのです。その約束事がキリスト教の福音つまり『新約聖書』であるというのが、レリジョンの言葉の意味なんですね。だからまあ、非常に尊い教えというぐらいなわけですけども、これは仏教でも、キリスト教でも、ほぼ似たような所があるんです。

ところがもう一つ大切なことがあります。それはその宗教と神道の関係です。明治新政府は神道を国教にしようとして保護しました。しかし、ヨーロッパから見ると、神道をあまり日本政府が保護すると、信教の自由に引っかかっちゃう。そうすると援助してやらないよとなりますので、明治政府が考え出したことが神道は宗教ではないという神道非宗教論という主張です。まさにイデオロギー的主張です。ですから、一般によく神道の祭祀というものは宗教ではなく、国家の儀礼であるとか、文化であると申します。だからあれは宗教じゃないんだから、国家が保護してもいいんだし、或いは国事行為としてもいいんだ、というような解釈を、導き出すことが可能なわけです。このように現代の宗教という言葉には都合三つの意味があるのです。言葉の多義性っていいます。しかし、この三つの言葉を私達は普段意識せずに使っています。一つの言葉として当たり前のように受け入れるわけです。ここの混乱がですね、実は政教分離というような問題にしても日本文化を理解するという上にしても大きな断絶と言いましょうか、見えないしこりと言いますか、そういうものを作っていると思うんですね。まあ、ここの辺のあんまり細かいこと申し上げますと、ちょっと時間が無くなってしまいますので、これくらいにいたします。

〈「空」の政治思想とは〉

いずれにしても近代以降の日本では、国家というものと、神道の理想国家としての神の国というものが、まさに一つであったということです。ところが日本の場合は、明治維新が神道革命みたいなもんであったという自覚がなくて、日本は古来から神道の国だったような認識が漫然とあります。その延長線上に、政教分離だとかというのが議論されますので、自己認識も不完全で言葉の定義も曖昧の内に議論する。議論がちぐはぐになる。私がこの『国家と宗教』という本を書いた時に、時事通信の高田信二氏が「Jiji top Confidential」（2006.11.7）で書評してくれました。高田氏は戦後の国家と宗教の議論というのはどうも理屈は分かるんだけど隔靴掻痒と言いましょうか、痒い所に手が届かないというような議論があったけれども、これほどストレートに政治と宗教は直接結びついてるんだと言われると、その通りだとつい思ってしまうと。何故今までこういう議論をしなかったんだろうかと、ついつい思ってしまうというようなことを書いておられます。まあ一つはそれは私が素人で玄人が持ってる常識を知らなかっただけの話なんです。しかしもう一つはやはり、この問題には暗黙のタブーみたいなものがあって、議論すると自分の足場まで洗われてしまう。存在基盤が危うくなってしまうような、そういう問題を含んでいると思うんですね。だから、専門家は議論しなかったんだと思います。

これはちょっと違うんですが、私は経済なんかちょっとやってまして、学生時代はちょうど、七〇年安保の終わりぐらいでしたから、早稲田なんて特に勉強するよりゲバ棒担ぐという先輩が多くてですね、授業があんまり無かったんです。で、マルクス主義経済学者という先生がいっぱいいらっしゃってマルクスは素晴らしい、ソ連は理想なんて仰ってたんです。ところが八〇年代を通してご承知のようにソ連が、中国がぐーっと衰退するんですね。するとマルクス主義経済学者がいなくなってしまったんですね。どこ行っちゃったんだろうか敢えて申しませんけども、環境問題とかね、そういうほうに頑張っておられますけど、ああいうその、自分の主義主張というものが倒れていく、その

恐ろしさと言うんでしょうかね、自己崩壊みたいな所がありますから、そういうものをやっぱり僕は怖れたんだと思うんですね。いずれにしても憲法問題というのは本当はもっと深くやらなきゃいけないと思うんです。政教分離なんだから、原則はこうなんだから守らなきゃいけないといいますが。では政教分離って何なんですかって部分は殆ど議論しない、戦前の神聖不可侵のトラウマが残っているのですね。僕はそういう面があって、議論が深まらない。そういう所を曖昧にするから、やはりきちんとした議論が出来ないんだと思うんですね。つまり、戦前の超国家主義、宗教と政治が一体化していたまさにウルトラ祭政一致国家という時代を皆さんが非常に辛く思っている証左です。まあ簡単に言うと、「羹に懲りた」そういう所があるとあったと思うんです。

しかし、戦後六十年も経ってですね世代が二代三代という風に経た時には、もう一回その原点に戻って、根源から考える、そういう柔軟さですよね。自分が一番頼りにしている、頼っている、そういう原理とかルールとか、或いは構造そのものをやはり一歩引いてこのままでいいんだろうか、というように考える柔軟さが必要だと思います。それこそ僕は仏教の空の思想の政治的展開というようなことになるんだと思うんですね。ただしですね、大事なことは、そうやって大事なことを相対化してしまって、なんでも相対化してしまっていいのかというとそうじゃないです。やっぱりそこには、仏教で言えば全ての人々の苦しみを抜いてですね、そこに生きる喜びを与えられる思想・政策は何かという基本的スタンスが不可欠です。そういう根本的な、つまり宗教的、まあ理想と言いましょうかね、そういうものを前提にしないでなんでも相対化してしまったというのが今の日本です。善悪も相対化しちゃってますし。ただ一つ、絶対的と言えるものは財貨ですよね。お金の多さ。お金になれば何でもいい、そういう風潮が、ちょっと顕著かなと、昔よりそういうところがあると思います。以上が今日の問題提起です。

Ⅱ部―仏教文明の再評価

〈聖徳太子の精神とは〉

少し長くなりすぎましたけども私はこういう日本の今色々な直面している問題に対して、どこにその処方箋と申しましょうか、帰っていくべき点を求めるか、いうことを今日お話するわけです。結論を最初に申し上げますと、ここに聖徳太子の憲法第二条を示しましたが、僕は今の我々にとって、この第二条が重要な示唆を与えてくれてるんじゃないかと思っております。この本を持っておられる方は一七〇頁からあるわけです。まず第二条は「篤敬三宝。三宝者仏法僧也。則四生之終帰。萬国之極宗。何世何人非貴是法。人鮮尤悪。其不帰三宝何以直枉。」です。この中で私が注目しているのが、「萬国之極宗」の部分です。「バンコクのオオムネ」と読むんだそうですが、この部分です。憲法十七条の研究をされる方というのはたくさんおられて、まあ、全部を網羅するなんてこととてもできないんですが、代表的な方々の論文とか論説を読ませていただきましたところですね、第一条から第十七条までありますけども、仏教に関して触れているところは仏教学者が重視しております。官僚制度とかなんとかっていうところは儒教の人達が重視します。しかしこの「萬国之極宗」という、この五字ですか、この言葉に関しての解釈は、殆どの先生が、さらっと流すわけです。厚く三宝を敬えの部分は、三宝とは仏法僧なり、そこに対してこれはインドのこういう思想だというようなことでは詳しい解説はあるのですけども、この「萬国の極宗」というものがいったいどういう意味なのだろう、ということを深く追求されるというか、解説される先生はあんまりいらっしゃらない。僕はここに、聖徳太子が仰りたかったこと、或いは、聖徳太子を支えていた世界観、太子の仏教に対する深い思いと同時にですね、仏教というものを何故受け入れなければならなかったのか、或いは何故受け入れたのかということが表わされていると思っています。つまり聖徳太子、政治家としての聖徳太子の理想、それがここに込められている。そしてこの思想で日本

を救っていこう、或いは作っていこうという理想に燃えておられた太子の気持ちが表れていると考えています。

何故かと言いますと、当時仏教文明というものが存在していたと私は考えています。当時、七世紀ぐらいですが、仏教は世界のまさに全てを覆う統一的な国際理解を作り出す、文明だったということです。まさに近代文明に等しい仏教文明というのがあったということです。だから当時の人は中国に行っても、インドに行っても東南アジアに行っても、朝鮮に行っても、みんな仏教徒ということで共通意識が持てたんです。つまり、仏教という一つの価値観を共有して、お互いに行ったり来たり物を買っても売っても信頼感というものを作ることができたのです。政治的にも、そういうですね。つまり仏教を理想とする国家を作っていくという強い意志がここには共有されていたのです。今でいうところのグローバルスタンダードという構造があったんですね。それは、聖徳太子のちょっと前ですけど、百済の聖明王から「仏教を受け入れてはどうですか」という勧誘、お勧めの言葉に明確に現れています。この文の中には、仏教を受け入れるということは中国の、孔子の教えなんかよりも遥かに優れているというのです。しかも仏教は遠く天竺から三韓、つまり百済までですね。全ての国が、受け入れているグローバルスタンダードなんですよというわけです。だから新興国日本も、これを受け入れてですね、そんな国を作ったらどうですか、というお勧めでした。

仏教は今葬式仏教だとかって皆さんもちょっと歯痒い思いをされていると思います。しかし当時はまさに、国家理念を建設するための、根本的教えなんですね。一方細かい例えば民法条項みたいなものは、これはもう儒教、中国から来た律令で構わなかったんです。しかしその前にある憲法にあたるような国家の礎を作る、或いは背骨になるような精神というものは、やっぱりですね、時代や地域、いわば人間のいろんな欲望とかそういうものを超えた理想、というものが明示されているものでなければならない。つまり憲法は、戦前のように日本を中心に世界が回るようなものではなくてですね、もっと世界全体が共有できる素晴らしい教え、みんなが豊かになれるような、幸福になれるような、安らかに暮らせるような、そういう国家を作るっていうような、そういう理想で出来ていたらなお良いですよ

ね。そして聖徳太子はその国家建設に必要な普遍的精神を仏教に見いだしたのです。だから十七条の憲法には人間というのは本来、誤りやすい、だからそれを矯正して良い方に導く、その方法が仏教なんだということが、国家の建設の理想という、その大きな目標と同時に具体的な事例としてここにぴしっと挙がっているんですね。聖徳太子ってそういう意味でも非常にバランスのとれた大政治家ですね。やはりその国家の根本に何が必要かを非常によく理解されている。その視点から仏教を受け入れて、日本の国家建設に役立てたのです。こういう精神が、やっぱりもう一回ですね再評価されていく必要があるんじゃないですかね。

宗教学に限らず近代の諸科学・文明の基本は、ヨーロッパから来てますからやっぱりキリスト教が基本です。日本では近代的っていうと何か宗教を超えてですね、合理性を至上とするという考えは再考すべきなのだと思います。錯覚されるかも知れませんけど、近代であろうが何であろうが、ヨーロッパの基本は、過去も、現在も、そして未来も、キリスト教と切っても切れない関係なんです。だから、近代の諸科学も決して宗教性がない、客観的であって中立的であるなんてことは、僕はあり得ないと思うんです。つまり合理性の背後にキリスト教の思考があるということです。だから日本人がですね、当たり前としてきたこの過去百三十年ちょっとですか、或いは、戦後の短い六十数年を考えてもそうですが、全部こうヨーロッパのものが良くて、或いはアメリカのものが良くて、日本のものはクエスチョンマークなんていうことになっています。しかしこのような考えは再考すべきなのだと思います。さっきこちらに歩いて来る時にですね、久々にパトカーを見ましたらですね、パトカーのボディに、警察じゃなくてPOLICEって書いてあるんですね。しかも、アメリカでよく、まあギャング映画って言ったら失礼ですけど、よく出てくるパトカーそっくりなんですよ。なんかみんなアメリカの真似をすれば、日本は幸福になれるようなですね、なんかそういう錯覚に陥っちゃってるのかなという気がしましてちょっとまずいなと思いました。

日本は歴史のある国なんですからその歴史を、日々の中で評価できるようなそういうですね意識を作ってかなきゃ

いけないですね。そういうためには僕はやはり伝統の重みの中で生きておられる、お坊さん方、神主さんとか、そういう人達にもっと発言してもらいたいという風に思っております。少なくとも私達の歴史の中にはですね千数百年前もから、聖徳太子に代表される方々がいらっしゃって、そしてそういう方々が時代に即して、いろんな提案をされて改革をされて今日に来ているわけです。そして、まがりなりにもじゃなくて、もう、はっきり言って大成功の国ですよね。私はインドが専門ですからインドを見ているとよく分かりますけど、もうインドの歴史なんてほんとに悲惨ですよ。異民族が入ってくる、或いは、異教徒に支配されるとかっていうような、そういう不可抗力的な歴史的悲劇というものが多々あったからでもありますけれども、時に際して適切なリーダーが出なかったのです。今日本は、そういう意味ではですね、長い歴史の一貫性というものの上でものを考えるという力を失ってしまったような気がするんですね。先が心配になるのは杞憂でしょうか。

〈お札に「カナ」文字はなぜないのか〉

これで第二に入ります。皆さんちょっと、あの、お疲れになったかも知れませんけど、ちょっとですね、日本人が、どのくらい伝統を大事にしていないかというのを知るいい例がありますので紹介いたします。お財布出していただけますか。持っていらっしゃらない方はいいんですが。僕はいつも申し上げてるんですけど、ここに人間にとって、すごく大事な、お札が入っています。命の次にという人もいるくらいです。さてこのお札の中に日本語ってありますか。日本語。日本語というより日本文字と言った方が良いかも知れません。どうでしょうかね。ま、ＹＥＮというのが、日本語でないとはいいませんけど、これローマ字ですよね。ローマ字ってのはヨーロッパの文字でフェニキア文字から来てるんですね。漢字もあります。チャイニーズレターですから、これ中国文字です。ジャパニーズレターはどこにあるんですか。それは「カナ文字」ですよね。日本人が発明した日本文字はカナ文字です。このレジュメを見てい

ただいても分かりますけど、ほぼ、七割、八割、「ひらがな」或いは「カタカナ」を使いますよね。私達は、「ひらがな」「カタカナ」を、自分達の文字として、ちゃんと作って普段、重用しているにも関わらずお札に関しては、「カナ文字」何処にもないんです。いや先生あの二千円札に、源氏物語絵巻の写しがあってね、草書体であるじゃないですかっていう人もいます。しかしあれは模様ですから。あそこに（にせんえん）とか書いてあれば別ですけどそれはありません。で僕は戦前から紙幣を調べてみました。例えば（きんいちえん）とかですね、（ごじゅっせん）とか「ひらがな」「カタカナ」で書いてあるお札を見たことがありません。但しこの紙幣は兌換紙幣なので、「これを持ってくると大蔵省で金（きん）に替えます」というような但し書きのあるものは、戦前には確かにありました。

何故、ここに（せんえん）という、「ひらがな」或いは「カタカナ」を入れられないのか。これは日本がずっとですね作ってきた漢字崇拝文化（その割に中国はバカにしてますけど）、の伝統ですよね。只し、鎌倉仏教の始祖達は違った。日蓮聖人とか、道元さんとか、あの方々が非常に偉い点は、「かな」を使ってですね、お説法をかかれたという点です。鎌倉時代のお坊さん達はエリートですよね。そのエリート達が、女性文字の「ひらがな」、或いは「カタカナ」で仏教を論じたのです。そういう文字を使って、お説法をするってのは恐らく比叡山とかからバカにされたと思うんです。教養の無い奴相手にしていると。でも、ほんとはですね、やっぱり国を基礎で支えているのは、その文化を支える民衆・一般の人々ですね。まあ要するに我々のようなごく普通の人間を相手にしたということです。実は、この点は日本の文化の中には、ちょっと希薄だった。それに対して日蓮さんとか、鎌倉の師僧達はですね、積極的に「かな」を使った。民衆に分かるようにです。そういう精神を復活しちゃったらどうでしょうかってことですね。だからそういうためにはお札なんかに（せんえん）とか（いちまんえん）と「ひらがな」で書く、「カタカナ」で書くというようなことが、僕は必要だと思います。基本的な発想の転換というものが、実はもっと日本を活性化するのに、すごく役立つと思うんです。

何回も申しますがお札で鼻かむ人は居りません。お金は大事ですもの。しかも国家の権威も荷負っています。その紙幣に日本語がない、日本の文字がない。僕はあの、職業柄ですね、色々な所を歩きますけども、日本だけじゃないでしょうか。自分の国の文字がお札のどこにもない国は。発音すれば日本語になるかも知れませんけど、おかしい。こういう点すらもですね。日本の近代っていうのは、自分の文化をおろそかにしすぎている。だから是非、お札に日本文字を入れようという運動をしていただくと面白いかも知れません。僕はこういうことが仏教的視点からみた国家観や政治思想につらなると思っています。

〈宗教対立から生まれた近代文明〉

何故仏教文明論なのかということでございます。その仏教文明のモデルっていうのがございます。絵が皆さんの所に行っていると思いますけど、従来の文明論とか、文化論というのは宗教というものが、文化のごく一部とみなされています。だから絵画だとか思想だとか、そういうレベルで、宗教は考えられてきた。簡単に言うと、政治や経済に口を出すなというそういうモデルが、十九世紀以来の近代文明モデルなんです。だから宗教家がですね、政治的な活動をすると、政教分離などと言う前にですね違和感を感じる。これはそういう価値観を図にしたものです。これは、ヨーロッパの十九世紀末から二十世紀初頭にかけて作られたヨーロッパ的な世界観です。ヨーロッパはご承知のようにですね、宗教と言いましょうか宗派ですけど、カトリックとプロテスタント、兄弟なんですけど、熾烈な殺し合いをしてまいりました。又魔女狩りなどでは、四五〇万人死んだとかですね。それからあの、プロテスタントとカトリックの衝突で、ドイツでは三十年戦争なんてのがありましたしね。どれだけ死んだか分からないです。親兄弟、まさに骨肉を相食むというよな、そういう凄まじい殺し合いをしかも神の名においてやってきた。神の名においてやられますから収拾が付かないんですね。しょうがないから、ウエストハリア条約ってのを結んで、これからはもう宗教と

言いましょうか、信仰の問題っていうのは心の中だけにしましょうとした。つまり信仰のような見えない所は議論しないことにしましょう。或いは芸術、そういう部分的なところに押し込めておきましょう、棚上げしましょうという立場です。

これは否定ではなくて棚上げってことです。以来経済や政治や、或いは科学技術、そういう人間の日常生活、現実的な生活の中には宗教を介在させない、或いはしていてもそういう風には考えないようにしてきたのが、ヨーロッパ近代文明なのです。このヨーロッパの近代文明、これはそれなりに上手く機能しまして、実際問題としてヨーロッパが世界を支配することになったんですね。で、その代わりに出てきたのが、例えばマルクス主義と、資本主義とですね。だからイデオロギー的対立。イデオロギー対立が激化している時は、宗教よりもそのイデオロギーの違いが、表に立っていた。イスラムなんか、忘れ去られちゃってました。ところがですね、このイデオロギー対立ってのは簡単に言えば政治対立です。この政治の本質というのは打算です。それをいかに有利にするのかを考えるのが近代政治学ポリティカルサイエンスです。このポリティカルサイエンスをですね、明治の初めの人が、面白い訳をしまして僕は、成る程と感心させていただきました。まさに政治の本質を表しています。つまりこれを「政治算術」と訳しました。算術です。要するに損得の駆け引きってことです。つまり、ヨーロッパの政治学というのは、政治の算術だということです。もっと言うと富や領土をどれだけたくさん得られるかということを計算する学問だということです。だから簡単に言うと、儲かる方法とは何か、算術ですからね、それを考える学問となります。だから我々が政治学、或いは政治の根本と言ってるようなものは、いかに自分にとって有利な方向に、自分をどう導くか、或いは、相手を自分の有利な方向にどうなびかせるか、という学問なわけですね。簡単に言うとお金とか権力とかそういうものを一番大切なものとする。その為には妥協も辞さない。それが近代の政治学なんですね。ですから、アメリカなんか見てみるとそうでしょ、日本と付き合ってるのがいいのか、中国と付き合うのが得なのかって、日本と付き合ったほうが得だと

判断すれば日本と仲良くするし、そうでないとすればパッと捨てて、パッと中国へ行く。ニクソンショックなんかそうでしたよね。そういう、その、ポリティカルサイエンスというものを支えていたのが実はこの、宗教は文化の一部、という概念です。だから、常に儲かるか儲からないか、損か得か、そういうのを議論するんですね。

それで、イデオロギー対立の時にはですね、ソ連とアメリカ、どっちにつくかで世界は割れた。ところがソ連が崩壊してしまいましたから、やれやれと思った途端に今度はですね、ヨーロッパの近代文明の限界が、そこであらわになったんですね。宗教というものを、人間が意識的にですね文化という中に押し込んで、そして飼い慣らせると思ったのが近代西洋文明でしたが、それが不可能だと再認識することとなった。それははじめから不可能なんです。しかしそれがですね一応飼い慣らせると思って、近代文明を作ってきたのがヨーロッパです。それに対して俄然と、ノーを突きつけたのがイスラム文明ですね。で、イスラムがですね、突きつけた課題というのは何かというと、政治よりも経済よりも、人間が生きていく上で一番大事なものが宗教であるということです。宗教の空間はこの世だけではなく来世も含めたものですよね。仏教的に言えば三世ですけど、過去、現在、未来というこの三世を貫く絶対的な価値観みたいなものを説かれている。こういうものを無視してですね、人間だけが世界の或いは、宇宙の支配者であるとか、世界は人間の為にあるというような人間に都合の良いように世界を作っていく支配していく、こういう考え方に対して、神を中心に置いた世界を作ったほうがいいんじゃないか。まあそういう視点の回復ということが、イスラムが突きつけた問いです。

〈宗教文明からの発言の必要性〉

今まで経済とか政治という中に宗教性と言いましょうか、日本でいう仏教、そういうものがあまりに意識されなかったのです。そしてこの問題点は何かということを申し上げます。先ほど申し上げましたように政治も経済もですね、

所詮は、損得勘定なんです。妥協の産物なんだということです。ですからそこには倫理とかいうもの、絶対的な価値観がないのです。僕は宗教ってのはこの逆だと考えております。それは頭だけで、つまり人間の都合だけで物を考えるんじゃなくて人間の五感を全て総動員してゆくことです。さらにいえば生きているだけの世界が世界じゃない、見えてる世界だけが世界じゃない。仏教でいうとやったらと長い時間が出てきますよね。あれは一つの、比喩ですから、まあ虚構だと言ってもいいかも知れません。しかし、微生物からありとあらゆる生物を合算すれば、仏教が提示する十の三十何乗などという数に到達しないとは限らないですね。ものすごい大きな量の生命が、この地球にいるわけですし、それぞれの生物には、それぞれの一生がある。さらにいえばこの宇宙にも、色々ある。生命だけじゃなくても物質とかですね。そういうものに対して、直接目が届く意識が届くということは不可能ではあります。

しかし天才がですね、そういうものをも含めた世界観を作ってきたのが宗教だと思います。そういう宗教が持っている一見荒唐無稽でとりとめもないような、その発想の中にやはり、近代の人間が合理性ということで切り捨ててきたものがある。つまり本来生物としての人間が、担っている役割というものに、気がつかなきゃいけないですね。そういう気づきと言いましょうか謙虚さのようなものを呼び起こすことがやっぱり宗教の、大きな役割だと思うんです。人間が自由に何でもしていいんだという人間中心の世界観、つまり近代的な世界観じゃなくて、個人の活動がありその個人の更に下に色々な生物があるというような縁起の思想の再評価ですね。こういう他者と自分を同等に考える同じ立場に、仏教の慈悲の考えが重要です。こういう世界観抜きに例えば今はやりの共生の思想であるとか、公共哲学とか、あるいはエコロジーとかいっている思想も同じようなことをやっても人間中心であったり、自分たちだけを中心に考えるというものは、やっぱり限界がある。全ての生き物とか、全ての物質自分を含めて、そういうものの中に自分は生きていて、それを感謝しながらそれを生かしていこうと、あるいは使わせてもらうというような、そういう謙虚な考え方が重要です。

僕はそういう考え方がなくて、ただ資源がもったいないからとか、資源が足りないからとか、というようなだけのエコロジーであったり、人間中心だけの自然保護であったりするということに関しては大きな限界があるだろうと思うんです。同じ行為でも、やはり深い、宗教的な背景をもって、その背景の中で活動することが大切だと思います。だから僕は今こそこの仏教、特に、日本人ですから日本仏教がですね「一切草木　悉有仏性」とか、そういう、全てのものが互いに関連しあっているという考えをもつ仏教を見直す必要があると思っています。インドでは物まで輪廻の関係性を考えないんですけど、日本の場合はもう、岩だろうが石だろうが小石だろうが無生物にまで、魂の循環といいましょうか霊を感じて、そしてそういうものに感謝してる。これこそまさに、究極的なエコロジー思想なんですが、そういうそのエコロジー思想というものを我々は持っているにも関わらず、それをあまり意識しない。評価しないんですね。もったいないと思うんですけどね。

Ⅲ部―仏教文明からの提言

〈現代社会問題への発言を〉

だからこのようなことを色々な所で提言していくということが、仏教の再生といいましょうか、再評価につながるのでしょう。ですからお坊さんが、我々学者がもっと日本の良さとか、思想の良さとかですね、仏教の良さを現代の問題に当てはめながら提言していくという必要があると思います。もちろん、イスラム文化圏やアメリカのキリスト教原理主義者のように、なんでもかんでも神様に聞いて、神様のせいにしちゃおうというようなのも行き過ぎですが、だからと言って神様なんかくそ食らえ、或いは仏様なんかくそ食らえと、いうような今の日本の風潮も行き過ぎのような気がしますね。やはりそこには、宗教に根差した文化が不可欠だと思います。では日常生活ではどこら辺まで、仏教的な思想文化のあり方を尊重するのかという議論をすることが不可欠でしょう。それが安定した国のあり方、或

いは生活の仕方につながるのではないでしょうか。

そういうわけでございまして、その、仏教の物の考え方というものをもっともっと自信を持って色々なものに提言していいんじゃないかな、という風に僕は考えております。

例えばこの一例なんですが、アメリカでは今、ちょうど選挙戦真っ盛りです。最大のポイントの一つが堕胎の問題です。こういう所でこういう話をするのが妥当かどうか分かりませんけども、アメリカでは妊娠中絶というものをしてはならないとする保守派が優勢です。神から預かった命を人間が人間の都合で闇に葬ってしまうということに対してものすごい厳しい反対運動があって、中にはその堕胎をする産婦人科医を殺してしまうというようなところまでいきますよね。それに対して、日本はどうか。これはあるところで聞いた話なんですが、ある小学生がお坊さんに「日本のお坊さんは水子供養を一生懸命やるけど、その水子供養の原因である妊娠中絶に関して、何も発言しないのはどうしてなんですか」こういう風に尋ねたんだそうです。で、そのお坊さんは答えに窮した、という話をあるお坊さんから伺いました。そういうものに対して、恐らく皆さんは個人的には、お説法で色々されていると思いますけれども、そういう問題が出てくる時に宗教界を代表してこうなんだという風に、大きな声で発言する、発言できるというような社会的風潮が無いんじゃないかなという気がするんですね。これやっぱり大きな問題なんだと思います。いずれにしても日常的な問題に対して、ある程度発言をしていけるそういう、社会そのものもそういうものを求めていくという方向が大切なんだと思います。そうでないと日本社会は迷走してしまうと思います。

つまり徒にアメリカの真似をしたりヨーロッパの真似をしたりして、その表面的な合理性だけを追求してくると、何で人を殺しちゃいけないのみたいなですね、そういう疑問が出てきてそれに対して有効な答えもまたは行動もできないような社会になってしまう。先日、週刊誌を見ていたら「くらげになった日本」なんて書いてありましたけど、やっぱり一本線が筋が通ってないって言うんでしょうか、そういうものが、今日本に欠けているのは事実です。です

から日蓮さんが鎌倉幕府からいじめられながらもこれをしなかったら日本が駄目になっちゃうんだと、佐渡に流されたり色々して大変な思いをされても考えを改めなかったような精神力、あるいは宗教心が大切なのでしょう。というのも日蓮さんが仮に政治的に考えれば妥協できたはずです。つまり大きなお寺を建ててもらうとか、偉い階級をもらうとかです。でもそれは政治的、つまり駆け引きですよね。日蓮さんはそういう損得勘定じゃなくて、まさに国家を救うとか、国の礎を作るという、まさに日本全体、世界全体を考えなければならないと考え、自分を犠牲にしても日本を変えてかなきゃいけないというようなそういう発想となったのでしょう。そういうところに仏教の理想はやっぱりあると思うんです。

〈近代への反省からの出発〉

最後に仏教の理想政治論ということなんですが、自他同置の思想を中心に政治理念を提言して行くべきだと思います。自他同置って何かって言いますと、自分を最後にして他者を優先にするとか、まあ色々ありますけど、相手の苦しみを自分の苦しみと認識するってことですね。要するに、自分と同じように相手を考える。自分を絶対化するんじゃない、ということなんです。アショカ王は最初、今で言うところの絶対君主ですからとんでもない悪い王でしたよね。それが仏教に改心することによって、自分を最後にして民衆のために一生懸命やる王となった。すると民衆も王を支えてくれる。こうやってお互いに豊かな国を作るという方向にいったわけですね。残念ながら国家運営としてはアショカ王は失敗と言っていいと思います。というのも彼が亡くなってすぐに王朝は滅んでしまうのです。しかし今でもインドの聖王といえばアショカ王です。もう亡くなって二二〇〇年ですよ。にも関わらず、アショカ王は偉かったと評価されています。それはでかい戦車を作って人を攻めたとか、大きな城壁を作ったとか、そういうのじゃなくて、旅人を助けるために駅舎を作り、井戸を掘り、人間から牛、馬、動物、鳥の病院まで作ってる。しかもアショカ

王は年貢、税金を低くして贅沢をせずに国民に還元した。王様としては非常に珍しい王様です。

僕は最近、中国にちょっと縁がありまして、中国に行きました。中国の皇帝ってのは、城郭の何割というようなでっかい宮殿に住んでですね、一般の庶民から見たらもう贅沢三昧ですよね。アショカ王は始めそうしてたようですけど、仏教徒になってからはそういう財をみんなに振り分けてるんですね。そして、質素な生活を送られた。日本の天皇なんか見ますとアショカ王の理想に非常に近いようなですね。天皇陛下が、贅沢したといっても日本の他の大尽とそんなに大きな差はないんです。僕はその、ここにも書いておきましたけど日本の皇室、特に天皇制に関して色々言われますけど、やはり、為政者がですね民衆に近い意識を持って、かけ離れた生活をしない、常に何かあると般若心経とか法華経を書写されて全国の神社仏閣にお配りするというような、伝統と言いましょうか、政治哲学がやっぱり日本という国を支えてきたんだと思いますし、これからもそういう方向がやっぱり日本的なんだろうと思います。

ところがそういう思想がどうも明治の時に切れちゃった、日本仏教最大・最高の後援者だった天皇が仏教を捨ててしまった。その意味で日本の精神史の伝統は半分切れちゃったと思います。恐らく皆様のお寺さんも廃仏毀釈の時にずいぶん痛手を被っておられるんだと思います。大きな痛手を被ったのが、日蓮宗と真言宗です。佐渡なんか行きますと、九十何パーセント、お寺が壊されちゃったとかいわれています。今は少しは再興はしているようですけども。

さて私は「インド仏教は何故滅んだか」というのをひとつの研究テーマにしておりまして、日本でも廃仏毀釈の状況を調査しております。そうしますと、まあいろんな事例があるんですが、単にお寺を壊したとかだけじゃなくて、やっぱり文化を壊しちゃったということを痛切に感じます。或いは、仏教に対する尊敬を損なった、傷つけた。というところがずいぶん大きいな、というのをつくづく感じます。ところがやったのが日本人、つまり我々の先祖ですから、その責任を追及するということはありませんけども、やはりそれに対する反省が必要だと思います。というのも、そういうことが殆どなされずに、なかったことにして前に進んじゃおうというところがあって、曖昧にされてきたか

らです。しかしその結果がやっぱり今の精神的な空白と言いましょうか、そういうものにどことなく繋がっているような気がします。もちろん仏教的な伝統っていうのも、一〇〇％良いわけではありません。又近代が一〇〇％悪いわけではありません。しかし今、近代以降の日本が作り続けてきた社会というものが大きな矛盾を孕んでいるのですから、改めなければどうしようもなくなってきたのですから反省は必要です。近代化にも光と影があるわけです。その時に影を見ずに、光だけを見て現状でいいんだというのはどうでしょうか。やはり影の部分をどうしていくか。光の強ければ強いほど闇も深いわけですから、その闇になった部分にどうやったら光を当てられるのかを考える必要がある。そうすることで次の成長の或いは次の発展の、エネルギーがあるんだと思うんですね。日本は非常に長い歴史を持ってますから、そこにこそ何かを見出すことができるし、そうしなければならないですね。さもないと日本人の心はバラバラになるのではないでしょうか。

〈孤人主義の克服〉

ヨーロッパでは個人というのは神と一対一の関係なんです。パチンコ玉のように神が、全てを一様に一緒に作ってくれた。だからヨーロッパの人達というのはどんな人間も神の前に平等なんだと考えます。その代わりその人達は、神に対して責任を持つ、神に対して服従しなければならない。日本は絶対神は居ませんから、個人主義にすると個々の人間がばらばらになる。皆が自分勝手に、孤立するのです。唯我独尊の生活になってしまってる。まさに個人主義ではなく孤人主義となる。ところが人間は、孤人じゃ決して生きていけません。つながり合っている存在です。しかし、そのつながりを孤人主義では喪失してしまう。そうすると社会も迷走してしまう。そうすると仏教でいうところの修羅のような世界が展開するわけですね。そういうものを救っていくのは、やっぱり、キリスト教やイスラム教の教えも可能だと思う。しかし日本には一五〇〇年の歴史がある仏教がある。だから仏教をもう一回、リニューアルし

て再構築するのが賢明でしょう。皆様方、ご住職とか、まあ我々は非力ですけれども、仏教とかそういうものをやっている人間がですね、そういうことに向かって努力していく必要があると感じてるんですね。

今日は政治の話というのを中心にするようにということだったんですが、なんかちょっと違う方向に行ってしまいましたけども、政治というものも、本来は政（まつりごと）ですから、これは単に権力の駆け引きとかそういうことじゃなくて、全ての民衆が、国民がといったほうが分かりやすいでしょうか、国民が、やはり豊かで安心して暮らせる、そういう世界を作っていこうと努力することだと思います。それが仏教政治の基本ではないかと思います。

ところで「衣食足りて礼節を知る」という言葉があります。でもあれはほんとにそうなのか。衣食が足りたということを理解するのが礼節ではないでしょうか。『法句経』に「たとえ黄金の雨が降ろうとも、人間の心は満足することがない」といっています。これはつまり人間はそのままでは衣食がいくらあっても足りることを知らないということです。どんなにあっても人間というのはほっとけばですね、もっと、もっと欲しがる。それをもうそこらで足りてるんだよ、むしろそういう欲望よりも、もっと素晴らしいものが他にあるんだよというようなことを気付かせるのが礼節つまり宗教です。特に仏教です。そういう意味で日本がこれからやっていかねばならないのは、経済の復興とかそういうのもありますけど、やはり自分達の文化、というものにある種の自信を持って、それを現代の社会の中に生かしていく、或いは世界に貢献していこうとそういうような崇高な意識ですね。そういうものにより価値を与えていく、見出していくことではないでしょうか。そういう風な方向が生まれてくるといいんじゃないかと思います。少なくともその方向に価値を見出せるような方向に発言していく必要があるんじゃないかなと思うんですね。そういう風に考えていくとやっぱりその日蓮さんが、身を賭して自分の理想、或いは仏教の理想というものを政治の中枢に向けて発言し続けた思想も少し理解できるようになるのかなという風な気が致します。

いずれに致しましても拙い話でございましたけども、とにかく仏教がもっと元気を出さないと日本というものの文

化も元気が出ない。逆に仏教の文化が盛んとなり日本文化が元気を出すと、日本全体の繁栄というのにも、大きな貢献をできるわけです。もちろん日本だけが繁栄するということはあり得なくて、世界に貢献することによって、また日本もそれなりに繁栄していくという縁起の思想を基本とする政治・経済思想や活動が不可欠だとおもいます。ところが、今繁栄というとビルが建って、おいしいものが食べられるというだけの繁栄です。もっとこう、精神的な繁栄というようなものも視野に入るようなそういう深い考え方ができれば多少経済的に没落してもそれを埋め合わせることもできます。

僕は仏教はそういう意味で、多元的相対理論と非常に崇高な哲学というものを併せ持った素晴らしい哲学であり、政治哲学であり思想であり宗教であると思っています。これが私の仏教的政治論いわば菩薩の政治哲学ということです。もっともっと仏教を自信を持って語れるような社会を作っていくことが必要だと思います。そのような社会の建設を考えること、実践することが仏教の政治思想・政治論だと考えています。

ちょうど時間でございますので、一応これでですね、言いたい放題の話を終わりにさせていただきまして、まあ、ご質問というかご意見というかお叱りというかあるかと思いますので、時間の許す限り、お伺いさせていただきたいと思います。どうもご静聴、ありがとうございました。（拍手）

質疑応答

司会　保坂先生、大変ありがとうございました。国家と宗教の関係性、政教一致・分離の問題から、最後は仏教文明論というようなお話までして頂きまして、勇気づけられたというか、或いは鼓舞されたというか、更に言えば、責任を感じさせられたというような、ところではないかと思います。

十五分間、質疑応答の時間を取ってございます、どなたでも結構でございますので。では望月先生、はい。

望月　顧問の望月です。他の方々も色々とご質問あるかと思いますが、その前に私、ちょっと個人的な関心から。今日のお話は国家と宗教という表題というよりは、仏教を、宗教というよりはひとつの文明原理として受け止めてみよう、という風な趣旨のお話だったと思います。私も細々と比較文明論みたいなものに興味を持っておりまして、トインビーであるとか、或いは最近のハンチントンであるとか、そういったものも読んでいるんですけれども、トインビーとかハンチントンなんかの場合には、仏教文明という位置づけが、全くないですね。で、キリスト教文明とか、イスラム文明とか、儒教文明とか、そういうものは非常に重要な形で世界史の中に位置づけている。そういう中で僕も、仏教文明というものが彼らに、正当に位置づけられていないということに、どうも首を傾げていたんですね。そんな中で先生のご著書を読ませていただいて、実は仏教文明というのは確固としてあるんだと、特にガンダーラ文明というものを原型として、空の思想といいますかね、そういうものを中心とした原理としてあるんだと。しかもそれは、聖徳太子の時代あたりには、当時の世界のグローバルスタンダードになっていたんだという風な指摘を伺って、私はまさに、目から鱗が落ちる、という思いをして、大変感謝しておるわけですけれども、その場合にですね、トインビーとかハンチントンというような文明概念と、先生が仏教文明という場合の文明概念との関係について、どんな風にお考えだろうかと。例えば、領域的、一定の領域の押さえている文明、或いはそれを超えた脱領域という風な形でも考えられるのかどうか、そこいら辺のことについてお伺いしたいと思います。

保坂　ありがとうございます。この点で面白いのは、トインビーですが、余りに膨大ですから、ハンチントン博士の『文明の衝突』という本に絞ります。彼はその著書で何故仏教文明と言わないかというところで、「仏教には政治哲学がないから」というのです。それも本文でなくて注にあるんです。そして、敢えて言えば、チベット仏教は、政治と宗教が一体化してますからね、あれは文明と言うことは出来るかも知れないというような、補足が付いて

るんです。それはどうしてかと言いますと、先ほども申し上げましたが現代の政治学というのは、ギリシャ、ローマの政治学ではなくて、やっぱりキリスト教的なものですね、その、預言者の宗教によって作られたキリスト教文明の中で育まれた政治哲学なんですよね。ですから政治の構造もやはり一神教的なモデルが前提になる。例えば憲法みたいなもの、或いは国王というのを置いて、同心円状にきちっとした形ができてないと政治も社会も又、その巨大化した文明も基本的に認めません。

ところが仏教ってのはご承知のように曼荼羅の世界ですから、ここが中心かと思うとこっち、こっちが中心だとこっち、でもここも中心となる。こういうのですと現代の文明論としては、なかなか捉えにくい。だから仏教政治学も仏教文明も彼らは認めないのです。しかし東部ユーラシアつまりインドからこっちですね。そういうものに即した文明論があってよいと思います。それを作っていかないとみんなヨーロッパ人の考え方に合わせようとするわけです。それがいけないわけです。例えば現代の文明論の欠点は他にもあります。例えば現代の文明論で問題になっているのは、遊牧民の文明を現代の文明では議論できないんです。どうしてかと言いますと、現代の文明は都市というものに、基本があります。都市ってのはご承知のように、土地があって、そこに城壁がある世界でしょ。ところが、遊牧民てのは、しょっちゅう動いてますよね。そうすると都市化してない、都市概念の最重要な要素である限られた空間の領土とかそういうものが移っちゃうわけです。或いは海洋文明もそうです。ちょっと津波が来てこの前のようにばーっと流されちゃうともうその部分に、王朝がなくなっちゃいます。しかし、同じような都市をまたこっちに作ります。都市はあっても固定的でない。移っちゃうんですね。こういう移動する文明というものを今の文明論では把握できない。つまり我々は、ヨーロッパで教わった文明論が、唯一の文明論で、この文明論でなきゃならないかのように教え込まれてるんですけど、これもひとつのサンプルです。やはり、そういう風に相対化して、仏教はこうなんだというような、その日本発のですね、ちょっと話がでかす

ぎますけど、僕はそういうものとしてですね、仏教文明論を議論していくほうが建設的なのかな、という風に考えます。よろしいでしょうか。

司会　望月先生、よろしいですか。その他にいかがでございましょう。では、石川上人。

石川　石川と申します。あの、廃仏毀釈が仏教文明を、文化を壊したことは、事実だと思いますけども、歴代天皇の中で、聖徳太子から、明治天皇の父親である孝明天皇までは、葬式は全部仏教でやってるんです。

（そうです）

しかも法華懺法でやってるわけです。

（はい）

で、明治天皇は、何故、簡単に廃仏毀釈に陥ってしまったか。その、いわゆる側近である岩倉具視とか三条実朝とか、そういう人の意見をあまりにも素直に聞きすぎてる。これは何故なのか。天皇になったのは十六歳、明治天皇が、その若年性によるものなのか。あまりにも仏教を簡単に壊しすぎた、その理由が分かりましたらお教え願います。

保坂　こりゃちょっと難しい、一言じゃ申し上げられないんですが、やっぱり僕は明治維新政府というのは、神道原理主義政府であっということだと考えています。しかもその神道も、それまでの神仏習合ではなくて、僕に言わせますとキリスト教と神道がくっついた神基主義、キリスト教神道です。これを、一般には国家神道と申します。まさに、天皇陛下というのは、父親のイメージで、キリスト教における神に代わるような存在に置き換え国家神道を戦前のような形に作っていったという研究があります。明治の初めに「今般王政復古のご一洗につき、旧弊を排して神国になる。そのために皆心改めよ」というようなお触れがでます。私が研究している群馬県のある地方誌にその記録が載っています。前田某がわざわざ地方を巡ったのです。その時に江戸時代威張っていた本百姓

みたいなのが零落していって、新しい指導層が江戸の末期ぐらいから出てくるのですが、そういう人達が、今までのものを壊して日本を新しくするためといって主導権を持つ。そういう運動が各地にあって、基本的には仏教が江戸幕府と心中させられる形で槍玉に挙がっていた、という事実は多々見受けられます。上のほうでも明治元勲の人達は、総じて仏教というよりも、日本の伝統そのものに対して批判的でした。私がお世話になった早稲田の大隈老公、福沢さんなどは、典型的ですよね。非常に批判的ですよね。それでいてお墓はですね仏式でしかも巨大です。大隈さんとかは護国寺にでかいのがあるんですよ。三メーターくらいあります。何を考えてるんだって言いたくなりますけど、学祖を批判しちゃいけませんけれど。

いずれにしても僕は明治の人達は政治的にその仏教、廃仏をすることによって自分達の政権を正当化していった。そういうイデオロギーなんですね。この神基神道の運動の中で仏教はやっぱり立ち後れちゃったというところがあったと思うんですね。

文明論で説明すると比較的簡単にできます。つまり文明の転換点、つまり政治的、経済的色々な面を勘案して、宗教というのはぽっと捨てられちゃう。そういう面がこの時の仏教にはあったのですね。これは、やはり仏教が、空であるということを、前面に出すが故のひとつの、致命的なものであると同時に、逆にそういう身軽さと言いましょうか、キリスト教やイスラム教のようにですね、これでなきゃならないというものが無い故に、今度はまた楽に復活もできるとも思うんです。だから、一回しぼんでしまったからもう駄目なんじゃなくて、またそれが逆に大きな武器になるといいましょうか。

その例が今インドの新仏教・アンベードカ仏教運動（現在、篠井秀峰師が指導する）ですよね。爆発的に増えているという情報があります。ただ統計的にはあんまり、明らかにならないんです。今、総人口の〇・七％ぐらいなんですね。ところがですね、いや四千万人くらい新仏教徒はいるんだともいわれていました。インドの不可

触民は国民の三割いるんです。その殆どが仏教徒になったら三億人になるなんて話もありましてですね（笑）、まだ、ちょっと分かりません。ただ、僕はそういう意味で、仏教の文明的理解というモデルを作って、そういう極端な変化というものをどう考えたらいいのかなというのを、今試行錯誤をしている状態なので、このくらいしか申し上げられないんですけど、お許しください。

司会　よろしいでしょうか。他にどなたか。では、片寄上人。

片寄　あの、関連として、お願いのような形をしたいんです。私の地元は宮崎なんですけども

（はい、宮崎県）

はい。鹿児島、宮崎は部分的には壊滅的に

（そうですね）

一向宗なんてのは全部叩かれちゃったような状況です。各地のそれぞれの事情があったと思うんですけども国家的な廃仏毀釈というものの背景が江戸期からあって、そして明治になり廃仏毀釈が行なわれた。そしてその思想的背景の中で、世界大戦にいくようなそういう精神的なものがあった。もし仏教で、仏教国としてつながっていたならば、果たしてどうだったのかな、というようなことを考えると、廃仏毀釈が行なわれたお陰で日本人は大変な苦労をすることになった。いずれにしても宮崎、鹿児島等のお寺は、地域的に資料がなにも残ってなかったりする。

（らしいですね）

その資料としてお墓という形でのみ残っているのです。そういうものを、是非ご研究され、国家的な部分で研究して出していただきたいなと願っています。これは現宗研でも昨年、宮崎方面にメンバーが研修に行きました時にそういうお願いもさせて頂きました。是非、そういう国家的な、世界的な目から見た廃仏毀釈の思想の流れ

という背景も含めてのご研究を発表していただきたいなと思います。

保坂　ええ、実は僕は群馬ではそれをやっております。親戚に神葬祭になってしまった地域があります。そこではお墓全部削ってですね神道の神名にしちゃうんですよね。結構過激なんです。宮崎は、あの『廃仏毀釈』という本も出されました。真宗の先生もいらっしゃいますし興味があります。しかしこの研究には協力者が必要です。しかしその協力者も親戚のつてを辿って行くと、「そんな話をするなよと、うちの先祖の恥だ」っていうようなことでですね（笑）、あの、却って叱られたりするんですよ。その家は明らかに仏壇を変えて神棚になってるんですよ。中覗くと、蓮の花が張ってあったりして。「おじさん、これ何ですか」と言ったら、いやこれはあれだよ、昔、転用したんだよとか言って言葉を濁しちゃうわけです。お墓わざわざ石塔を削る。仏像なんかぱーんと割ってしまった。首を落として、後で急いでくっつけたもんだから全然違ったようなのになる。こういう事例は、枚挙にいとまがないんですが、資料が無いということと説明をしてくれる人がいないということですね。

私は早稲田の学生に毎年宿題を出しております。「自分の家に帰って、調べてこい」と言うとですね、一生懸命やってくるんですね。中には、なんで今頃そんな研究しに来るんだと言って追い返されましたとかですね（笑）、書いて、あるんですね。やはり僕はそういうことは恥とかじゃなくって、私達の身近に宗教というものを通じて日本に蓮が立った時期があって、それを乗り越えてるんだ、ということを、自覚することが思想的強みになると思っています。かつて僕がこの研究をしたら曹洞宗の僧侶の先輩でしたけど、「お前、なんという研究をするんだ。我々、ようやく百年経ってね、あの事件を忘れて、仲良く神道の人と会話ができるようになったのに、わざわざ傷口開いて塩を塗るようなことをするな」と怒られました。でもそういうことを通じてやっぱり日本の伝統というものを大事にするという思想になっていかないといけないと思います。私はそういうことなので、もし、あの、皆さん、ご協力いただければすぐ参上いたします。研究費も、そのために持っておりますので、是非では

ご協力いただける先生方、後でお知らせいただきたいと思います（笑）、よろしくお願いします。

司会　まだあるかと思いますが、お時間がまいりましたので質疑応答はここまでとさせていただきます。保坂先生、どうも大変ありがとうございました、お疲れ様でございました。（拍手）